

本郷住枝(歌人)の短歌小論 —京都西陣の光と影を詠む意義—

奥 浩 昭

On *Tanka* Poems by HONGO Sumie — The Significance of Depicting the Glory and Decline of Nishijin, Kyoto —

Hiroaki OKU

Abstract

This article aims to demonstrate three significances of *tanka* poems by HONGO Sumie (1934 ~), who has lived for sixty years in *Nishijin*, Kyoto: the significance of her poems in depicting the glory and decline of Nishijin fabric industry and the ever-inspiring historic places of and figures in Kyoto; the beauty and artistry of her poems in exploiting a variety of rhetorical expressions; the possibility of making ordinary Japanese people realize the beauty and richness of the Japanese language. Among her conspicuous rhetorical expressions is the use of onomatopoeia like *saya-saya*, light and rhythmic sounds of a bamboo or a small waterfall, describing a Nishijin fabric machine and a small waterfall in a well-known garden in Kyoto. Another is the frequent use of *hikari* or light, referring to encouraging aspects of the world around her. In a *tanka* poem her late husband is associated with light (*hikari*) and a shield (*tate*). Not well-known to the *tanka*-related people, the poet deserves, the author believes, to be accepted as a distinguished Nishijin- and Kyoto- related poet. (Kyoto and Nishijin need a poet who gives literary description of its glorious culture and history.) Her use of *uta-kotoba* or words frequently used in *tanka* poems like *modasu* or 'to remain silent' might enable ordinary Japanese people to be impressed with not-daily-used beautiful Japanese expressions, thereby being more interested in their native language.

Keywords : *tanka* poem, Nishijin, Kyoto, Nishijin fabric industry, rhetoric, onomatopoeia, Japanese language

【初めに】

本稿は、本郷住枝(1934～)の『京都西陣—うたを紡ぐ—』(2017)他三歌集の文化史的意義(韻文による京都西陣の光と影の表現)と、氏の用いる様々な技法の詩的効果及び一般読者にとっての意味の検証を目的とする。本郷は短歌の総合誌などで名の知られた歌人ではない。しかし有名無名と短歌の評価は別である。無名である作者の歌の質の高さを示したいと思う。

短歌の評価に当たり本稿は、作歌をしない一般読者を引き付けるものについての、前 [16] と永田 [15] の以下の見解に従う。

前 [16] は次のように述べる。

- 1 一般作歌者の生活詠は読者を引き付ける歌の技法を欠き、作歌者の自己満足となっている。
- 2 一方「芸術としての短歌」を追求する作家者(歌人)の中には、技巧の追求に熱心なあまり、一般読者の共感(感動)にたどり着かないものが多くある。
- 3 事態の打破のためには、「短歌固有の詩心」(＝抒情詩をうたうという生の原点)に立ち返らねばならない。また、作られた「作品」よりも、まず短歌を作るという作者の生き方につながる繰返しのかかない表現行為のうちに、ぬき

さしならぬ大切な意味をみるべきだ。

「短歌固有の詩心」(心構え)をもって生み出される短歌(広く文学)を前[16]は「述志の文学」と述べる。本郷の上記歌集は筆者に「述志」の歌集と受け止められた。そのことを説得的に論述したいと思う。

永田[15]は、近藤芳美と塚本邦雄という、作歌姿勢が正反対の歌人のいずれの歌をも評価する。批判も多い近藤の作歌姿勢に、伝えたいこと、大切に思っていることを一徹に詠む近藤、人生観と作歌を同一線上でとらえる近藤に永田は感動する。一方、近藤とは作歌の姿勢をまったく異にする塚本の芸術至上主義的精神、「歌人の生活や思想」と「出来上がった歌への評価」とを峻別する塚本の姿勢に深く共感しつつ、その塚本の歌(の一部)を理解するのに、塚本の人生(歌の詠まれた背景)をある程度踏まえた上での鑑賞が歌の理解を深め得ることを、永田は指摘する。ただここで確認しておかなければならないのは、作品の外の情報は一切抜きにして作品そのものに魅力がなければ、その歌は価値をもたない、ということだ(前もその認識を共有する)。西陣の光と影を詠んだ本郷の作品を論ずるに当たっても、永田[15]のこの認識を前提にしなければならない。

本稿の流れは以下のとおりである。 1 本郷の西陣との関わり 2 詠む対象から見た氏の短歌の分類 3 氏の歌の核となる語(キーワード) 4 氏の短歌に特徴的な技法

本郷の短歌を論ずるに際し、次の著作(いずれも歌人の作)で展開されている短歌の技法や短歌への批評を導きとした。

【歌人の生き方への共感を出発点とした歌人論】

木畑紀子『雨宮雅子の歌一〇一首鑑賞』(2005 柘書房)

杜澤光一郎『宮柘二・人と作品』(2013 いりの舎)

【短歌の技法】

坂井修一『ここからはじめる短歌入門』

(2010 角川学芸出版)

来嶋靖生『韻律・リズム 短歌の技法』

(2003 飯塚書店)

今野寿美『歌ことば100』(2017 本阿弥書店)

木畑が一人の歌人の歌から受けた感動の大きさは、筆者が昨年秋、京都西陣で本郷の歌集を偶然手にし、受けた感動の大きさと同質のものである。杜澤の情熱的な論は、師である宮柘二の短歌の技法を詳述しており、大いに教えられた(木畑も本郷も、宮柘二創設の短歌結社(コスモス)に属している)。また坂井[11]の論考には、学者(情報系)らしい冷静なものでありながら、種々の技法に支えられた短歌の魅力が教えられた。来嶋[8]は短歌の諸技法を網羅的に紹介しており、筆者には教科書的存在である。今野[11]の取り上げる「歌ことば100」の約半数を本郷は歌に取り込んでいる。

筆者は、作歌をしない。ただ、同じく作歌をしない一般読者よりいくらか多くの近現代歌人の短歌に触れて来た。そのような立場から、本郷の短歌の魅力を描けたらと思う。同じく作歌をしない、作家関川夏央のことばを借りれば、「生活者にとって詩とは何かという主題である。同時に日本語とは何かという主題にもかかわっている」(関川[13])。先に、「氏の用いる様々な技法の。。。一般読者にとっての意味の検証」と書いたのは、生活者(一般読者)にとって詩(短歌)とは何か、日本語とは何かを、本郷の短歌の鑑賞を通して行う、ということを目指している。

なお、本稿で取り上げる本郷の歌は、西陣(での生活)や西陣のある京都に言及したものに限定する。したがって、次のような、氏の短歌の世界を豊かにしている歌は除外する。但し、本郷の歌の「核となる語」(「ひかり」)では、西陣と京都を詠んでいない歌も取り上げる。

ことごとく葉を落しつつ冬櫛そらに

神経叢のごとき枝張る

一枚の重力をおもふ柿の葉がふーはり

ゆれて落ちゆくところ

水の輪を描きて浮き来し池の鯉あざとふ

口の舌なき簡潔

アラビア語木の実拾ふがに聞きて行く

ホルス神殿くらき石段(いしきだ)

【1】西陣を詠う歌人としての本郷の短歌

本郷住枝(1934～)は、奈良県天理市に生まれ、高等女学校時代(1951年)に短歌結社に所属。その後結婚と子育ての時期を経て歌を再開(1970年。コスモスに所属)、以後、歌を詠み続けている。『黒門通り』(1998 柘書房)、『晩照』(2010 本阿弥書店)、『京都西陣一うたを紡ぐ』(2017 大垣書店)を上梓。歌集の「あとがき」に、歌に対する氏の姿勢が語られている。

- 四十年間住みつづけております黒門通りは、今も格子戸の家の残るあたたかい通りです。どこかにひろがり夢をもっている通りです。(『黒門通り』)
- 縁あって西陣に嫁いでより半世紀たちました。当時はまだあたたかい格子戸の並ぶ街並みでした。路地のあちこちよりことん、ことんと地を這うような機音が追いかけてくる街でした。(『晩照』)
- 京都西陣に嫁してより六十年経ちました。この間に西陣は大きく変わりました。その都度詠み溜めてきた歌です。西陣が出来て五百五十年という節目の年に思いがけなくも、日本を代表する写真家の一人である水野克比古氏の写真をお借りしての歌集出版となりました。。。昭和二十年頃の頃

から始めた短歌に現れる西陣の風景は、時代に応じて変化を遂げながら現在に至ります。（『京都西陣』）

本稿の執筆を思い立ったのは、昨年秋の『京都西陣』との遭遇によってである。偶然西陣の一角にある清明神社の秋の例大祭でこの一冊と著者の本郷に会った。その場で一読、氏の西陣への思いの強さと、歌の質の高さに惹かれた。以来、氏の所属する短歌結社「コスモス」の歌人他の手になる歌人論に目を通した。中で、同じように一冊の歌集に惹かれたことがもとで歌人論を書き上げた木畑紀子（コスモス所属の歌人）の『雨宮雅子の歌一〇一首鑑賞』（2005）が強く印象に残った。歌人雨宮雅子の歌集『秘法』との木畑の出会いと本郷住枝歌集『京都西陣—うたを紡ぐ—』（2017）と筆者との出会いに、ゆるやかながら共通するものがあると感じたからである。

木畑が歌集『秘法』に出会ったのは1989年、歌集が出版されたその年である。氏の著書の「はじめに」によると、当時木畑は精神的な危機にみまわれており、救いをキリスト教に求めていた。『秘法』に木畑が見たのは、キリスト教への信仰と格闘する歌人雨宮雅子の姿であった。また、『秘法』の短歌の言語芸術作品としての質の高さであった。木畑は、雨宮雅子の短歌から歌人としてえたものを確認すべく、雨宮雅子論を書き上げた。以下、「まえがき」から引用する。

- 『秘法』を。。。自分にひきつけて読みながら、私は雨宮作品にどんどん惹かれるようになっていった。第一歌集にさかのぼって読みすすむと、想像をはるかにこえた生の苦難が、歌の背景にあっておどろかされたのだが、苦しみは決して生々しいものではなく、誌的昇華をとげてむしろ美しい姿をしているのが不思議であった。
- 本書執筆の動機もまた。。。私が雨宮作品からもらったものを再確認してみたいという、まことに個人的な希求に根差している。

対するに筆者が本郷住枝歌集『京都西陣—うたを紡ぐ—』（2017）に見たのは、全盛期の西陣の商家（帯問屋）に嫁してやがて、西陣の衰退に次ぐ衰退に見舞われ、個人的な苦悩もあり、暗い現実につぶされそうになりながら、西陣の明日への希望を失うまいとする一人の人間の姿であった。苦悩や希望を詠う氏の短歌は、筆者に極めて質の高いもの（詩的昇華をとげているもの）と映った。筆者は、本郷の詠む短歌の魅力を支える技法を検証しようと思う。

以上が、雨宮短歌への木畑の関心と本郷の短歌への筆者の関心に共通する点である。加えて筆者は、「西陣」という、京都、ひいては日本の重要な文化を詠む歌人としての本郷の短歌作品の意義を重視している。

雨宮と本郷、共に現実に前向きに向き合おうとする姿

勢を表明する歌として、次の二首をあげる。

透明な傘をひろげてゆかんなこの世の
岸のけふる際（きは）まで（雨宮）
はづしたる看板の下月さしてタイル鮮し
諾ひてゆかな（本郷）

「ゆかんな」と「ゆかな」は同義である。「この世の岸のけふる際」を木畑は、「たぶんこの世の果ても雨にけぶっているだろうというのは一種の諦念である」と解釈する。そして、「この世は自分もふくめて蒙昧の世である。それは命の終わりまでつづくことだろう。「透明な傘をひろげてゆかんな」はそれを見据えていこうという覚悟の表れではないだろうか」と述べる。一方本郷の歌の「はづしたる看板」とは、夫の死後も必死に守った帯問屋を閉め、看板をはずしたことを指しており、その現実を歌人は「諾ひてゆかな」と受け止めている。「諾ひてゆかな」は、「一種の諦念」、現実の受入れである。

【2】詠む対象から見た氏の短歌の分類

第100回の「夏の甲子園」の優勝旗に西陣の布が使われた。京都西陣は不滅、との思いを抱かせるできごとであった。その西陣や京都を詠う本郷の歌は、日本文化の中核にある京都と京都の代表的な文化のひとつである西陣を愛する人々の記憶に残ってほしい。以下、西陣と京都の歌を、いくつかの側面から取り上げる。「人々の記憶に刻まれてほしい」と筆者の考える歌を紹介する。個々の歌の歌としての価値（評価）については、【4】の「技法」の項で論ずる。

【2.1】西陣

本郷の歌を通して、西陣の、過去と今の暮らし（あけくれ）が見えてくる。

【街・家】

家制度に本家をまもり質実にありし西陣
格子戸の街
鋭（と）き夏のひかりを踏みて歩くみち
機と糸とに賭けしこの街
糸屋格子、仕舞屋格子にならぶ街ほのかに
あかる虫籠（むしこ）窓あり

【歴史】

鈍重なくりかへしとも千年の機の継承
おもし歴史は
記されず語らず消えし機の技織られし帯に
今も残れり
五百五十年の歴史まもれる西陣のこころと
技はたてよこの糸

【帯、糸、袖】

指先にこもる精魂織る帯に凶案の雪が

積もりてゆけり
 綜紉屋、紋屋、糸屋と西陣の職業おほよそ
 糸につながる
 袖の露、袖のしがらみ、袖時雨をみなの
 ころ袖にまつはる

【2.2】西陣の職人

本郷の歌から、西陣職人の生き生きとした姿や矜持が
 浮かんでくる。

機もちて嫁入るといふ西陣の乙女の一世(ひとよ)
 糸につながる
 ひと織りに糸と織りとを対話さす織り女の
 くらし機により来ぬ

【2.3】西陣の光

嫁して数年、本郷は西陣の繁栄の中に暮らした。
 ゆくりなく機音ききて佇つわれにリズム
 さやさや喜びつたふ
 下請けの機音の多き路地の朝地(つち)に
 ひびきて機音ひびく

その記憶は、西陣が傾いた後の氏の心の支えとなった。

西陣の活気あるころ仕舞屋も下駄屋の
 おくにも機音のあり
 記憶より掘りだして聞く機音がはたり
 はたりとむらさき紡ぐ

【2.4】西陣の影

西陣の衰退が具体的に描かれる。それを通して読者の
 脳裏に、日本を代表する伝統工業の衰えていく様が印象
 深く刻まれていく。

【音】

じわじわと樺木(しめぎ)のごとく不況きて
 機音いつか間遠になりぬ
 出機より切られて織子去りゆけば西陣
 日毎に音をうしなふ

【織機・糸】

手あぶらにひかる箆、杼が無造作に
 積まれて織部屋がらんどうなり
 織工場に糸くずのこりつぎつぎと織り機
 幾台もちさられゆく

【建物】

どーと倒れし筆立てのごと一刻者きみの
 店はも倒されゆきぬ
 のこりある老人のごと格子戸のくらく
 並べる西陣の街

【街】

とめどなく廃りてゆける西陣に豆腐屋の
 ラッパ消えて久しも

灯の上にまた灯のつきて織物の工場跡地
 マンションとなる

【不安】

不況下の店のことなど思ひつつ己が
 ぬくみにいつか眠りぬ
 長き橋を渡れる不況にうつうつとあらがひ
 きれぬ西陣に棲む

【店を閉める】

暗がりに底のぬけゆく感じにてわが帯問屋
 閉づる日は来つ
 はづしたる看板の下月さしてタイル鮮し
 諾ひてゆかな

【2.5】西陣の明日への希望

『京都西陣』に稿を寄せている末木文美士(ふみひこ)
 (仏教学者。国際日本文化研究センター名誉教授。本郷
 宅での月に一回の歌会に参加)は、氏の歌に「西陣の明
 日への希望」があることを忘れてはならない、としてい
 る。次のような歌がそれに当るだろう。

応仁の乱の破壊をのり越えし機の文化よ
 絶やしてならず
 大幅に減るとも失する事はなし機音小さく
 つづく西陣
 相続税に崩れゆきたる糸の街千両ヶ辻に
 梅咲きはじむ
 不況かぜ機屋の街をあほるとも今日
 いちりんの木瓜にあかるむ
 機とまる街に小さき影つらねとかとか
 子供走りてゆけり

応仁の乱で生き残った寺社は僅かに三つであった
 (三十三間堂、六波羅蜜寺と西陣の千本釈迦堂)。乱と直
 接に関係のある「西陣」(東陣と西陣に分かれて10年の
 戦いが繰り返された)は、乱の後から今日に至るまで
 幾多の危機に遭いながらその度に乗り越え、今日まで存
 続してきた。その自負と責務の思いが「絶やしてなら
 ず」の命令表現に強く込められている。次の新たな展開
 と興隆へ向けての、今は細々とではあっても持続の時
 である。「失する事はなし」、「機音小さくつづく」の二句に、
 その思いが語られている。氏はかつて夫と共に畑地を借
 りて家庭菜園を楽しんだり、また自宅の庭に植物を植え
 ている。植物は氏の日々を支えるひとつであり、「今日
 いちりんの木瓜」はそのことを伝えている。氏にはまた、
 孫を詠んだ歌がいくつかある。子どもは誰にとっても明
 日を託す対象であり、明日への希望である。「小さき影
 つらねとかとか」走ってゆく子どもの姿は、氏に西陣の
 明日への希望と映る。

氏の希望を美しく詠った歌がある。

柚子入れし袋を胸にいだく時明日に

ほのかな望みをもてり

【2.6】西陣の位置する京都の風景

本稿のサブタイトルを「京都西陣の光と影を詠む意義」とした。西陣は「京都西陣」である。西陣に住み、西陣を生業とした本郷が西陣を詠むと同時に京都を詠むのは必然である。

『京都西陣』は「格子戸の街」の11首に始まる。

御所囲みあがるさがるの鎧地に栄へ
きたりし京都西陣
うすうすとひかりを保つ比叡山とほく
仰ぎて西陣に棲む

。。。。

筋立（すいたて）に模様織りゆく爪織りに
爪のばすなき若き織子ら

11首中西陣以外の言及は比叡のみである。『京都西陣』を初めて読んだとき最も印象に残った歌のひとつがこの歌であった。比叡を詠んだ歌がもうひとつある。

春かすみ雨にのりつつ降りてきて比叡の
山をゆつくりつつむ

西陣を囲む京都を思い描く際、比叡の他に愛宕山、鴨川が心に浮かぶ。また、暑さの京都。

曇り日に斑雪ひからせ高だかと愛宕山見ゆ
落柿舎を背に
一本の脚はねむらせ白鷺がしづかに夏の
加茂川に佇つ
あかときを浮かぶ白雲動かねば京都は
けふも蒸しあつき日か

次に、西陣の近くあるいは西陣の一角を詠んだ歌を引用する。まず、西陣の氏神である今宮神社。この神社には長い歴史を誇る「やすらい祭」がある。この祭りの有する意義の大きさを、林屋辰三郎は名著『京都』（1962）で述べている。

京都の祭りはほとんど御霊会に結びついているといえる。。。市内・近郊の祭りはたいていこのながれをくんでいる。なかでも今宮神社の今宮祭は、春光のどかな四月十日に風流傘（ふりゅうがさ）のもと、赤毛をふりかざし、鉦と鼓で、「やすらい花や」と歌いおどりながら、花ちるころにはやる疫疾をはらうのである。

その祭（夜須礼の祭）を氏は詠む。

花被（かづ）く綾傘朱し夜須礼の祭に集ふ
群れより高く
み社を練りゆく朱き傘の上（へ）に揺れて
明るしさくらやまぶき

筆者は2017年のやすらい祭に出かけた。観光客はあまりなく、地元の人たちの祭との印象を強くもった。しかしこの祭のもつ意義の大きさを思えば、氏が歌に残した

意味は大きい。

西陣の中心（氏はそこに住んでいる）近くに北野天神がある。

霧の中を霧の流るる正月のしづけきあした
北野天満宮（きたの）に詣づ
西陣そのものを詠んだ歌。

御所囲みあがるさがるの鎧地に
栄へきたりし京都西陣
門ごとに打ち水さるる石畳いつきに涼し
町家西陣

京都市内の地に言及する際、「上がる、下がる」がよく用いられる。

坂らしき坂はなくとも上がる下がる
京の洛中日陰をあるく

京都を特徴づけるものの中に地蔵や鍾馗（しょうき）がある。

苔の間にちんもりいくつのわらべ地蔵尺に
みたざるいのちたふとし
厄除けと屋根に小さき鍾馗さま
頬もりあがり小さき剣もつ

数多の寺社仏閣や歴史上の人物から詠まれているのは、

旅ごころ紡ぎつつゆく野々宮のくろもじ
柴垣どんぐりの色
花びらの一つ供花（くげ）ともしづかなり
紫式部のつつましき塚
緑苔のおほふ去来の小さき墓かがめば
しろき帆船のかたち
希ふまま師のへにありし蕪村の墓小さき

石のやすらふさまに
円錐の立砂しろく洄るる庭箒目すずし
上賀茂神社（かみかも）の昼

平安の世、人生の苦を生きる民とともに生きた仏教者に空也がいた。空也は今も、民の心に。

念仏の行脚に生きし市聖空也の像は
ひそけくあるも

【2.7】西陣に生きることの光と影

西陣の帯問屋の二代目であり、西陣の繁栄と凋落を味わい、先に逝った夫を、本郷は詠む。夫亡き後の数年を氏は必至の経営を試みるが、子ども達が跡を継ぐことなく、店を閉める。

ひかりにも盾にもなれるわが夫よ
あなたの子らは西陣離（さか）る

【2.8】西陣に生きる

本郷は、西陣に住み続ける。そして、西陣を、京都を詠み続ける。生きていく限り、希望をもって。その姿に、氏の歌を読むものは励まされる。

きしませて帯を巻きつつあたらしく
会ふべきところ整へてある
美しきものに連なりいまわれは心のなかに
機音聞く
なにを捨てなにを拾ひて来しわれか
六十年を西陣に棲む

【3】本郷の歌の核となる語

本郷の歌でもっとも重要な、核となる語として「ひかり」を挙げたい。三つの歌集に合わせて35回用いられている。『京都西陣』（第3歌集）の巻頭のページの第2首に位置し、また、『黒門通り』（第1歌集）の最後に置かれている。西陣または京都を詠んだうたからいくつか挙げる。

- 1 置き捨ての厨のごぼう芽を噴けり五月の窓の
ひかりに向きて（『黒門通り』）
- 2 雪の上に雪が消えゆく大屋根のにひどしの
ひかりところに嘉す（正月の京都）（『晩照』）
- 3 うすうすとひかりを保つ比叡山とほく仰ぎて
西陣に棲む
- 4 鋭（と）き夏のひかりを踏みて歩くみち機と
糸とに賭けしこの街
- 5 ひかりにも盾にもなれるわが夫よあなたの
子らは西陣離（さか）る（以上、『京都西陣』）

『京都西陣』の「ひかり」（11首）はすべて京都について詠まれた歌である。『黒門通り』の掉尾の歌の「五月の窓のひかりに向きて」は、西陣の光と影を生きる本郷の生きる姿勢のように思える。4.の「ひかり」は、「鋭（と）き夏のひかり」（＝強烈な京都の夏のひかり）の中で「西陣に賭ける」人たちへの共感（エール）である。本郷に亡き夫は「ひかり」である。

【4】本郷の短歌に多用される技法

「技法」を「平板な表現では伝わらないこうした思いを伝える手段」であると、坂井[12]は定義する（「こうした」は何であれ人が強く抱く感情）。本郷の短歌の技法を論じるに際し、坂井の提示する枠組みを基本とし、ほかにいくつか加える。坂井の枠組みは次のとおりである。

【短歌の技法】

【1】【韻文一般の技法】

・ 比喩（直喩・暗喩（隠喩）・寓喩・擬人化） ・ 構成法（反復・対句・倒置・反語・体言止め） ・ 引用 ・ 押韻（頭韻・脚韻） ・ オノマトベ（擬声語）（擬音語・擬態語） ・ ことば遣い（口語・文語・口語・文語混用） ・ 表記法（歴史的仮名遣い（旧かな）・現代

仮名遣い（新かな）・漢字・かな・カタカナ）

【2】【短歌に特有の技法】

・ 枕詞 ・ 序詞（無心の序・有心の序） ・ 掛詞
・ 本歌取り ・ 区切れ（初句切れ・二句切れ・三区切れ・四区切れ・切れなし（無区切れ）・句割れ・句またがり・切分法） ・ 破調（字余り・字足らず）

坂井[12]が取り上げていない技法は次のようなものである。

・ 初句の効果 ・ 修飾被修飾の関係 ・ 副詞 ・ 連辞（syntagm）

以下、本郷の歌に顕著に用いられた技法を取り上げる。

【4.1】複数の技法が用いられている例

まず、複数の技法が用いられた歌をいくつか紹介する。

- (1) 機とまる街に小さき影つらねとかとか子供
走りてゆけり
 - 1) 「機とまる街」（静）と「子供走りてゆけり」（動）の対比。西陣（静）の子供（動）
 - 2) 「とかとか」というオノマトベの力。
どかどか：大勢が足音高く行くさま。
とかとか：軽やかな感じ
 - 3) 「影」と「つらね」の組み合わせ。影かさね、ではなく、影つらね。
- (2) 糸くずは糸くずなりに曳きあひぬ
重量もたぬ彩（いろ）のかたまり
 - 1) 曳きあふ⇒重量（もたぬ）⇒かたまり
（ニュートンの「引力の法則」を背景とした、「おかしみ」のある表現）
 - 2) 糸くず「なりに」：ユーモアを感じさせる。
 - 3) 彩のかたまり。かたまりを持つのは物質。彩は物質ではない。でも、「彩のかたまり」はスーッと理解できる。鋭い表現力。
 - 4) 何でもない現象（日々目にしているであろう光景）をこのように表現できることへの感心。
- (3) 褪せにつつ朝ざむに咲く桔梗のひたすらの
花われもはげまな
 - 1) 「褪せにつつ朝ざむに咲く桔梗の」は「桔梗」の「序詞」として機能している。
 - 2) 「ひたすらの」と「花」は通常の結びつき（collocation）ではない。
 - 3) 「ひたすらの」と「はげまな」が意味の上でひびき合っている。（4.8.0）で述べる「連辞（syntagm）」の関係。
 - 4) 「ア音」が12個。全体を5-(5-2)5-(5-2)-(5-2)と分けると、8個の中の6個（「桔梗の」と「ひたすらの」以外）は「ア段」で始まる。「ア音」は「あらたまつた荘重厳肅な感じを伝えるのに大きな効果をあげ」と、来嶋[8]は指摘している。

- (4) ほのあかるオクラの黄花かにかくにけふが
始まるはじまるけふが
- 1) 「ほの」という接頭辞。オクラの「黄」の色をも形容。「ほのあかる」は「始まる」「はじまる」とも響き合う。「何とはなし」の希望とともに一日が始まる。
 - 2) 「かにかくに」という副詞の効果的な使用。祇園の歌人吉井勇の名歌を想起させる。「かにかくに祇園はこひし寝(ぬ)るときも枕のしたを水のながるる」
 - 3) 「けふが始まる」「はじまるけふが」：繰り返すと対比（語順転換）

【4.2】 比喻

本郷は比喻、特に直喩をよく用いる。

【4.2.1】 【隠喩】

くるまりて眠る夫のうつしみに咲(ひら)きし花
が肺の癌とは
傾く西陣の帯問屋を懸命に立て直そうと奔走した夫が
ついに病に倒れ、それは不死の病であった。それを示す
一枚の画像に映る花の像。

緑苔のおほふ去来の小さき墓かがめば
しろき帆船のかたち

去来の墓は落柿舎の裏の数多の墓のひとつとして、
ひっそりと在る。「帆船」の比喻は美しい。

夫といふ蓑に隠れしあけくれとつつしみ
仰ぐみ佛の前
ひかりにも盾にもなれるわが夫よあなたの
子らは西陣離(さか)る

本郷に夫は「蓑」であり、「ひかり」であり、「盾」で
あった。

いづこにも異端者はるる眠りたる蚕の中に
うごく数匹

「異端者」は滑稽味のある喩えだ。

【4.2.2】 【直喩(ごと)】

西陣をめぐるさまざまな局面が「ごと(し)」の直喩
表現を用いて描かれる。

【西陣織】

蝶々の羽根いろのごと羅が透けて手織の
帯が身にそひてくる
経糸と緯糸対話するごとしことんことんと
帯織られゆく
角家(かどいへ)の正面側面立体に基盤の
ごとし西陣の街

【逝く夫】

ほうほうと底なし沼に入るごとし病院に
ひとり夫を置き来て
両手もてつつめどもはや温もらぬ透くごと

美しき夫の面輪は

【西陣の苦境】

のこりある古い人のごと格子戸のくらく
並べる西陣の街
どーと倒れし筆立てのごと一刻者きみの
店はも倒されゆきぬ
じわじわと榨木(しめぎ)のごとく不況きて
機音いつか間遠になりぬ

【悲しみの中で】

やうやうに来たる眠りは海のいろただよふ
ごとく闇に入りゆく
水のごとき寂しさ納め口紅をひきて
おもての顔になりたり
湯におどる卵のごときたよりなさわたしの
今を知る人のなく

【希望】

つつむ手を開きゆくごとふくらみて辛夷は
うすきピンクをひろぐ

【4.3】 【反復、対句】

ビル建てどスーパーあれど西陣の糸に凭る
街家並古ぶ

この歌の鑑賞に、木畑[9]の鑑賞をそのまま当ては
めることができる。

くるしきは共有できず白粥のひかりを
炊けどひかりを置けど
(「炊けど」「置けど」という逆接の重なりが、病
む者と看る者のへだたりを照らし出している。)

「ビル建てど」「スーパーあれど」という逆接の重なりが、
西陣と「ビルやスーパー」のへだたり、不調和を照らし
出している。

反復や対句の例を挙げる。

記されず語らず消えし機の技織られし帯に
今も残れり
軽やかに音重ねゆく糸練りの音はそのまま
西陣の音
袖の露、袖のしがらみ、袖時雨をみな
のころ袖にまつはる
むなしさは前より来り寂しさは背後より
来る 月みて歩く

【4.4】 【オノマトペ】

本郷は、擬声語・擬態語(オノマトペ)を積極的に、
巧みに使う。

うながされ拾ふ夫の喉ほとけ無機質のしろ
ほろほろとしろ

「ほろほろ」にはいくつかの意味がある

- 1 葉や花、涙などが静かにこぼれ落ちるさま。

はらはら。「山吹の花びらがほろほろと散る」
「ほろほろ(と)涙を流す」

- 2 山鳥などの鳴く声を表す語。「山鳥がほろほろ(と)鳴く」
- 3 力を入れなくても、ばらばらになるさま。「口の中でほろほろ(と)崩れる」
- 4 大勢の人が出て行くさま。「修法(ずほふ)の壇こぼちて一と出づるに」〈源・夕霧〉
- 5 物が裂け破れるさま。「綻(ほころ)びは一と絶えぬ」〈源・紅葉賀〉
- 6 歯でかんで食べる音を表す語。「栗などやうのものにや、一と食ふも」〈源・宿木〉

出典 デジタル大辞泉

この定義に従えば3.である。「力を入れなくても」という点から、「ほろほろ」に対する「ほろほろ」。これに1.の意味も加わるだろう。それは、夫の喉ほとけの骨を拾う作者の心情である。

他の例を挙げる。

機とまる街に小さき影つらねとかとか子供
走りてゆけり
記憶より掘りだして聞く機音がはたり
はたりとむらさき紡ぐ
無鄰菴瀧さやさやと音はして庭を統べをり
冬木立のなか
ゆくりなく機音ききて佇つわれにリズム
さやさやよろこびつたふ
(佐々木信綱) 波きるやおとのさやさや
月白き津軽の迫門(せと)をわが船わたる
機止めに音のなき路地つんつんと雪駄
鳴らして男すぎたり
長き橋を渡れる不況にうつうつと
あらがひきれぬ西陣に棲む
うすうすとひかりを保つ比叡山
とほく仰ぎて西陣に棲む

【4.5】ことば遣い(口語・文語・口語・文語混用)・表記法(歴史的仮名遣い(旧かな)・現代仮名遣い(新かな)・漢字・かな・カタカナ)

坂井[12]の分類を参考に本稿では、和語対漢語、和語に充てる漢字、漢語の効果、なじみのない語、口語表現を取り上げる。

【4.5.1】【和語・名詞】【和語・動詞】

日常に用いられない和語の使用は、「日本語の魅力を再認識」につながる。本郷の歌に例を取ろう。

最初に、名詞。

じわじわと榨木(しめぎ)のごとく不況きて
機音いつか間遠になりぬ

- ・「ma do o」というひびきには「停滞感」がある。

夫といふ蓑に隠れしあけくれとつつしみ
仰ぐみ佛の前

- ・私は俳句はもろびとあけくれのうた(諸人旦暮の詩)であると考えています。

(日野草城)

- ・一日を「あけ」と「くれ」で表現する。「あけくれる」には没頭、「ひたすら」の意味が伴う。

起きがけの素水(さみず)に身体よみがへり
さてなにをせむ今日もひとりに

- ・さみず→さて→せむ。サ行音の効果。

両手もてつつめどもはや温もらぬ透くごと
美しき夫の面輪は

- ・「美(は)しき」という形容詞も、「日本語の魅力の再認識」につながる。「も」のたたみかけも効果的だ。

格子戸の間(あひ)より見えて織元の

棚いろどる糸の華やぎ

里の道歩めるひまを鳴りつづくひとつ吊鈴
うれしみて持つ

み社を練りゆく朱き傘の上(へ)に揺れて
明るしさくらやまぶき

からみ合ふ糸屑いくつ織部屋の裸灯の
照りに黒きかげ曳く

- ・裸灯の照り。漢語(それも辞書にない)と和語の組み合わせ。

機もちて嫁入るといふ西陣の乙女の一生
(ひとよ)糸につながる

- ・「人生」を「じんせい」と読むのと「ひとよ」と読むのとでは、大きな隔りがある。

次に動詞の例を挙げる。

無鄰菴瀧さやさやと音はして庭を統べをり
冬木立のなか

- ・大きなこのしづけさや高千穂の峰の統べたるあまつゆふぐれ

齊藤茂吉

- ・「さやさや」、「統(す)べをり」と、「サ行」は「さわやかな感じ、乾いた感じ、すがすがしい水の流れ、葉擦れの音などに効果をあげ」る

(来嶋[8])。

里の道歩めるひまを鳴りつづくひとつ吊鈴
うれしみて持つ

- ・「かなしむ」とは言うが、「うれしむ」がこのように使えるのは、多くの人にとって発見だろう。「さびしむ」はどうか。

松かぜのおと聞くとときはいにしへ
のひじり聖のごとくわれは寂しむ

（齊藤茂吉）

日陰なる首なき羅漢に首よびて父とし
をろがむうつし身われは

- あけたてば埴もてむすびくれゆけば
佛をろがみ思ふことなし

（大田垣蓮月）

蓮月（1791～1875）は京のあけくれを大切に生きた。

はだへいろ、柿いろ、黄丹（わうに）の
いろ並めてかもめの足いろ冬の空ゆく

- やすみしわが大君、高照らすわが日の皇子の、馬並（な）めて、。。。 （柿本人麻呂）

陰鬱であるはずの冬の空が突然カラフルに。

しつとりと注連縄はも雨を吸ひためて

鎮もり深し神の大杉

整経機しづもる窓に昼どきを悲恋の演歌

ものうげに鳴る

- ひかり なき みだう の ふかき
しづもり に をたけび たてる
五だい みやうわう （会津八一）
- たたかひの最中静もる時ありて庭鳥
啼けりおそろしく寂し （宮柊二）
日常では「しづまる」と言う。「しづもる」
のもたらす荘厳な響き。

花被（かづ）く綾傘朱し夜須礼の祭に集ふ

群れより高く

この胸に響き来るもの待つ吾にただに

黙せり十五個の石

はづしたる看板の下月さしてタイル鮮し

諾ひてゆかな

ひんやりと秋の青空しらみそめ医師

息子らに夫を委ぬ

倒産し夜逃げしゆけるこの家の物干しは

はや錆をもち初む

馥郁と笑まふお亀の像あふぎ女はつよし

この西陣も

ビル建てどスーパーあれど西陣の糸に凭る

街家並古ぶ

【4.5.2】【漢語の効果】

短歌では和語が多く用いられるが、和語の中に漢語が効果的に用いられることがある。橋本喜典の次の歌がそうである。

落葉の遅速も天の摂理にて枝を離るるその

かろやかさ

『無冠（1994）』

落葉、遅速、天、摂理の語は、厳粛さを表している。

「落葉の遅速も天の摂理にて」「枝を離るるそのかろやかさ」。前半の荘厳から後半のかろやかさ、やわらかさへ。「軽やかさ」ではなく「かろやかさ」のひらがなも効果的にはたっている。また、「その」も効果的である。

同種の鑑賞を二つ挙げる。

- 1) 最上川の流のうへに浮びゆけ行方なきわれの
こころの貧困 茂吉『白き山』
柔らかい和語の言葉をつらねて調べをはこび、
結句では漢語の「貧困」を見事に際立たせて
いる。

大島史洋『齊藤茂吉の百首』（2016）

- 2) 秋風は過去の索引そのなかに萩咲けば萩思ひ
出づらむ 馬場あき子『飛種』
過去の索引：挑発力のあるうたい出しが新鮮
歌林の会編著『馬場あき子百歌』（1998）

本郷には次のような歌がみられる。

指先にこもる精魂織る帯に凶案の雪が

積もりてゆけり

「挑発力のあるうたい出しが新鮮」との馬場の短歌への評は、本郷のこの歌にも当てはまる（いずれも名詞の二句切れ）。西陣の職人の情熱と匠と自負を凝縮した一語、「精魂」。

他に、

鈍重なくるかへしとも千年の機の継承

おもし歴史は（「鈍重」と「継承」）

内職に出機を織りて過ごすとふ西陣の

をんな閑暇を持たず（「閑暇」）

重おもとにぶく光れる月鉾のこの緞通は

ベルシャの渡来（祇園祭）（「渡来」）

からみ合ふ糸屑いくつ織部屋の裸灯の

照りに黒きかけ曳く

（「裸灯」。広辞苑（第七班に記載なし）

芸術院賞受賞しませる師のお顔今朝新聞に

動悸して見つ（本郷の歌の師である宮柊二）（「動悸」）

看板と共に亡き夫降ろされて秋の乾坤

しろくただよふ（「乾坤」）

政変を越えて残れる仏像にこもごも

やさしき剥落のあと（「剥落」）

【4.5.3】【充てる漢字】【漢字とかなの使いわけ】

「充てる漢字」や「漢字とかなの使いわけ」の効果を、次のような歌が示している。

地にきこゆ斑鳩（やまばと）のこゑにうち

混りわが殺（と）りしもの声がするなり

（宮柊二『群鷄』）

宮の教えを受けた本郷にも、そのような豊かな漢字の使い方がいくつもある。

鋭(と)き夏のひかりを踏みて歩くみち
 機と糸とに賭けしこの街
 下請けの手機の多き路地の朝地(つち)に
 ひびきて機音つづく
 起きがけの素水(さみず)に身体よみがへり
 さてなにをせむ今日もひとりに
 咲きそめし梅は互(かた)みの距離もてり
 ほつほつひらくうす紅のいろ
 くるまりて眠る夫のうつしみに
 咲(ひら)きし花が肺の癌とは
 查き事のやうに聞きゐる機の音われの昔を
 ゆさぶりて来る
 賃機が干され糸繰りなくなりて時代に
 従(つ)けぬ人らこゑなく
 ひとつふたつと零(こぼ)るるあかり
 いつ知れず老舗きえゆく西陣の街
 しつとりと注連縄はも雨を吸ひためて
 鎮もり深し神の大杉
 整経機しづもる窓に昼どきを悲恋の演歌
 ものうげに鳴る

「神の大杉」には「鎮もる」の漢字が適切。整経機に「静」ではなくひらがなを当てた意図は、と考へてみるのも、短歌を読む楽しみのひとつ。

曲がりかど多き街なかまたまがり路地を
 ぬけきて機の鳴る街

「曲がり角多き街中また曲がり路地を抜け来て機の鳴る街」と表記することもできる。漢字とかなのバランスは散文でも興味ある問題である。

【4.5.4】日常、なじみのない語

水仕する気配さみしも機音の絶えて久しき
 路地の日の暮れ
 西陣に店を守りて百年を生き来し
 姑(はは)やしるく衰ふ
 軒下に睡蓮の咲く西陣の路地の日かげに
 過去世がにほふ(=前世。4例あり)

「水仕」や「しるく」、「過去世」のような、ふだん目にする散文にはみられない日本語に接せることにより、読者の日本語の語彙が広がる。

【4.5.5】【口語表現】

本郷は圧倒的に「文語派」であるが、時に口語表現を用いている。

こんなにも寂しい時がくるなんて
 カチャリと錠を下ろして終ろう
 半年をねむりて孵りし毛蚕のため
 何はさて措き桑買ひに出づ
 起きがけの素水(さみず)に身体よみがへり

さてなにをせむ今日もひとりに

【4.6】四区切れ

来嶋[8]が指摘するように、現代の短歌の主流は三区切れである。本郷においては句切れなしが最も多く、次いで三句切れが見られる。それに対し四区切れの特徴として来嶋[8]は、「それまでに一首の大半を述べていったん切り、結句でそのイメージをさらに強調しあり、逆転」と指摘する。本郷は四句切れをも積極的に詠む。【倒置と解釈できる】結句で開示される「場所」に焦点が当てられる。

はな満ちてとりごえ満ちて四百本のさくら
 満開平野神社に
 只中にあれば不況の言葉すら言はなく
 なりぬ織屋わが街
 眼鏡屋のめがねそれぞれ光りつつ雨を
 みてをり誰もみぬ街
 角家(かどいへ)の正面側面立体に碁盤の
 ごとし西陣の街
 にびいろのひかり溜めゐる唐井戸の中に
 風あり蘆山寺の庭

【結句の発する強いメッセージ】

鈍重なくりかへしとも千年の織の継承
 おもし歴史は
 応仁の乱の破壊をのり越えし織の文化よ
 絶やしてならず

【結句に込められた暗い現実や疲労感、東の間のほっとした思い】

焦げ付きの債権いくつそのままに生きねば
 ならぬ資金繰りする
 むなしさは前より来り寂しさは背後より
 来る 月みて歩く
 起きがけの素水(さみず)に身体よみがへり
 さてなにをせむ今日もひとりに
 おくれおくれの入金なれど手にしたる
 今日を喜ぶ夕べより雨

【4.7】坂井[12]の分類に載っていないレトリック表現

ここからは、坂井[12]の分類に載っていないレトリック表現を紹介する。

【4.7.1】【初句の効果】

宮柊二の歌に対する杜澤[14]の次の鑑賞に多くを教えられた。

うつうつと汗ばむ吾が身熱あれば悲しき
 顔に河童寄り添ふ (宮柊二『晩夏』)
 初句〈うつうつと〉は、心がふさいで楽し

くないさまや、気分が晴々しないさまをいう形容動詞の連用形の副詞的用法で、直接的にはすぐ下にある動詞〈汗ばむ〉を修飾しているのだが、この初句はさらにその下にくる〈熱あれば〉や〈悲しき顔〉や、結句の〈河童寄り添ふ〉をも修飾するちからをもって働いていることを、読み落としてはならない。（杜澤 [14]）

この解釈を宮の別の歌にも適用できる。

びしびしと白き霰を凍る土鋼（はがね）の
ひびく音にて迎ふ （宮柊二『獨石馬』）

意味の通りやすい語順にすれば、「凍る土白き霰をびしびしと鋼のひびく音にて迎ふ」となるだろう。そして、「びしびしと」は「ひびく」と「迎ふ」を修飾する。それに対し掲出歌では「びしびしと」は、「白き」や「霰」、「凍る（土）」をも形容しうる。

本郷の歌から、同様の解釈が可能と思われるものを挙げる。

ゆくりなく機音ききて佇つわれにリズム
さやさやよろこびつたふ
「ゆくりなく」は、「ききて」、「佇つ」、「つたふ」とひびき合う。

ゆくりなく見たる屋台のお好み焼（おこのみ）に
削りかつをがゆつくりをどる

（北野天満宮の天神市）
じわじわと榨木（しめぎ）のごとく不況きて
機音いつか間遠になりぬ

どーと倒れし筆立てのごとく一刻者きみの
店はも倒されゆきぬ
やうやうに来たる眠りは海のいろただよふ
ごとく闇に入りゆく

とめどなく廃りてゆける西陣に豆腐屋の
ラッパ消えて久しも

馥郁と笑まふお亀の像あふぎ女はつよし
この西陣も

ぼつねんと昭和の顔して天満宮に並ぶ
露店の亀の子たわし

【4.7.2】【修飾被修飾の関係】

竹西寛子の散文に、修飾・被修飾関係の逆転による、修飾語の焦点化とそれに伴う引き締まった名詞表現が見られることを、かつて論文に取り上げた（「文体としての『名詞立て』—作家竹西寛子の散文を手がかりに—」（2006））。例えば、

福寿草は、何枚も描いていた。よほど気に入った画材だったのであろう。住んだどの家でも幾種類もの植物を育て、鳥小屋に鳥を、池に鯉を飼っていた。むろん好きであったからこそ出来たのだと

思うが、後になっての気づきは、画材の新鮮を求めていたのかもしれないということである。（『「いとおいしい」という言葉』）（新鮮な画材→画材の新鮮）

齊藤茂吉の歌についての大島 [5] の次のコメントも同趣旨のものである。

ただひとつ惜しみて置きし白桃（しろもも）のゆたけきを吾は食ひをはりけり

茂吉『白桃』

白桃（しろもも）のゆたけき：ことばの回転が巧み、なんでもない些事が、豊かなふくらみとなって一首に漂っている。

配給をうけし蕨のみじかきをおしいただか

むばかりにしたり 茂吉『小園』

「みじかきを」というとらえ方。単にワラビとあるのとでは大きく違う。

竹西には次のよう表現も頻出する。

蕪村は、現実と非現実をないまぜて、言葉の世界特有の美しさを現出してみせる名手である。目の前の山川草木も句の素材なら、既に見た歴史の文物も、未経験の現実も対等な素材であって、それらを区別する無意味と不自由を彼の句は仕上がりで納得させてくれる。（『俳句によまれた花』）（それらを区別するするのは無意味→それらを区別する無意味）

本郷の歌にも同種の例がある。

参道の長きをおほふ今朝の雪ただに真白く
ふくらみを待つ

「長き参道」が普通の語順であろうが、逆転させることで、その表現が読者をひきつける。以下、類例を挙げる。

くつきりと一直線に展く闇竹の単純こきみ
よきかな（←単純な竹）

殺されし鹿のあはれにその角を終生杖に
あるきし空也

われのみの食事の思案いつしかに夫の

好みになりゆくあはれ

（←夫の好みになりゆくのはあはれ）

【4.7.3】【副詞】

作者の思いを強める表現手段としての副詞を、本郷は効果的に用いている。

【ひたすら】

褪せにつつ朝ざむに咲く桔梗のひたすらの
花われもはげまな

ひたすらに励める蟻と哲学をなしるる亀が
甕のうちそと

遺伝子もミームも知らないあの小さな白い
蟻たちの、あのひたすらの動きは何であっ

たのか？

日高敏隆『生きものの流儀』（2007 岩波書店 P154）

【ただに】

参道の長きをおほふ今朝の雪ただに真白く
ふくらみを持つ
この胸に響き来るもの待つ吾にただに
黙せり十五個の石
手まねきて三つ四つ七つ咲（ひら）きゐる
御所のしら梅ただに見て過ぐ

本郷の歌の師である宮柗二に次の歌がある。

目にまもりただに坐（ゐ）るなり仕事場に
たまる胡粉の白き塵の層（かさ）（『群鶏』）

【ただただ】

妻われに言葉なきままに逝きにたり
ただただ冷えて眼ひらかず

【おのづ】

立て砂の雨水ふくむ砂の粒ひとつぶひとつ
ぶがおのづひかれり（上賀茂神社の景）

【4.7.4】【造語・合成語】

『京都西陣』の巻頭の歌に出てくる「鎧地」は、広辞苑に記載されていない。

御所囲みあがるさがるの鎧地に
栄へきたりし京都西陣

他に、「熟れ実」や「吊鈴」、「裸灯」も。

手に届く熟れ実もぎつつ越えてゆく柚子の
木多き水尾山畑
里の道歩めるひまを鳴りつづくひとつ吊鈴
うれしみて持つ
からみ合ふ糸屑いくつ織部屋の裸灯の
照りに黒きかげ曳く

【4.8】連辞（syntagm）（言語学者ソシュールの理論の枠組みの中の用語）

赤羽 [17] は、一個の詩の中での語と語のひびき合う関係と、それがもたらす詩の豊かさについて、いくつもの例を引いて論じている。例えば、

祖母

三好達治

祖母は蛍をかきあつめて 桃の実のやうに合せた掌（て）
の中から 沢山な蛍をくれるのだ
祖母は月光をかきあつめて 桃の実のやうに合せた掌の
中から 沢山な月光をくれるのだ
この詩において、「かたちの上での反復は、入れ替えた「蛍」と「月光」の間に意味の上での等価な関係を生み出す」と指摘する。蛍と月光の間に意味上の（場合によっては音の上での、であっても構わない）関係が生じ

る。相乗効果を上げる。

中西進は和歌を例に、同様の認識を示している。

連辞は、文を構成する時間上の関係で、線上的な記号の連鎖をなす。要するにわれわれの目の前に与えられている表現、話されたり書かれたりしたものは、このような連辞としてとらえられるべきもので、何も枕詞にかぎるものではないが、しからばなおのこと、枕詞という表現形式のもつ言語上の特徴は、この連辞的な関係の中にこそ求められなければならない。（「枕詞とF・ソシュール」（『亀が鳴く国—日本の風土と詩歌（2010）』）所収）枕詞を一首の他の部分と「ひびき合わせる」べきとの論である。

連辞の考え方により本郷の次の一首はより豊かに鑑賞される。

柚子入れし袋を胸にいだく時明日に
ほのかな望みをもてり

「柚子」と「ほのかな」が、「香りを放つ」という点で呼応している。同様に、「いだく」と「望み」が。また、「初句の効果」（4.7.1）で例に引いた「じわじわと榨木（しめぎ）のごとく不況きて機音いつか間遠になりぬ」では、「じわじわと」が「不況きて」だけでなく、「間遠になりぬ」とも関係をもつ。

【4.9】歌ことば

今野 [11] のあとがきで今野寿美（歌人）は「歌びとは、貴い財産である歌ことばを1300年を超えて守りつづけ、その自覚のもと、ことばをねんごろに使う営為を重ねてきたといえるだろう」と述べている。今野 [11] が取り上げた100の歌ことばの内51個を本郷は取り入れている。

格子戸の間（あひ）より見えて織元の

棚いろどる糸の華やぎ

くるまりて眠る夫のうつしみに

咲（ひら）きし花が肺の痛とは

咲きそめし梅は互みの距離もてりほつほつ

ひらくうす紅のいろ

ひかりにも盾にもなれるわが夫よあなたの

子らは西陣離（さか）る

鋭（と）き夏のひかりを踏みて歩くみち機と

糸とに賭けしこの街

内職に出機を織りて過ぐすとふ西陣の

をんな閑暇を持たず

どーと倒れし筆立てのごと一刻者

きみの店はも倒されゆきぬ

この胸に響き来るもの待つ吾に

ただに黙（もだ）せり十五個の石

ゆくりなく機音ききて佇つわれに

リズムさやさやよろこびつたふ

【5】【最後に】

本稿は本郷住枝の短歌の魅力を次の観点から明らかにした。

- 日本の伝統文化（西陣織）の光と影を、短歌という日本の伝統文化で印象深く表現している。
- 従来の短歌論で取り上げられていないレトリックを含め、種々の表現を効果的に用い、上質の短歌を生み出している。
- 作歌をしない日本人は、氏の短歌を通して日本語の豊かさに気づかされる。

歌に精進する本郷の姿は、歌人上田三四二[4]の「底荷」の論を思い起こさせる。短歌や俳句を上田は、「現代の日本語というこの活気はあるがきわめて猥雑な船を、転覆から救う目に見えない力」と位置づけ、短歌や俳句の創作に勤しむ「商店主であり、運転手であり、教師であり、主婦であるそういう普通の生活者」を、「短歌、俳句において驚くべきすぐれた言葉の使い手なのである」と評価する。これらの人々が追求する短歌や俳句を上田は次のようにとらえている「私は、短歌、俳句の言葉は日本語の中でもとくに格調の正しい、磨かれた言葉であると思っている。的確に物を捉え、思いをのべるのに情操のかぎりをつくし、正確に、真実に、核心を衝く言葉を選ぶのが短歌であり、俳句である」（『短歌一生』（1987））。歴史と文化、そこから生まれる伝統と格式をもつ西陣の商家（帯問屋）に嫁し、西陣の盛と衰を目の当たりにし、加えて人間関係を含む種々の困難に直面しながら、それを短歌という言語形式に昇華させることで生の充実を追求する氏の実践は、短歌を日本語の底荷として自覚している人間の行動である。「指先にこもる精魂織る帯に凶案の雪がつもりてゆけり」「不況かぜ機屋の街をあほるとも今日いちりんの木瓜にあかるむ」「柚子入れし袋を胸にいだく時明日にほのかな望みをもてり」「うすうすとひかりを保つ比叡山とほく仰ぎて西陣に棲む」等は、「的確に物を捉え、思いをのべるのに情操のかぎりをつくし、正確に、真実に、核心を衝く言葉を選んだ氏の、珠玉の短歌である。

河野裕子・永田和宏 [7] を始め、京都市内外のよく知られた地を詠んだ短歌のアンソロジーがある。本郷の歌はそこに収められるに足る質を有している。例えば、「機とまる街に小さき影つらねとかとか子供走りてゆけり」。

本郷住枝は、「述志の文学」としての短歌を、「日本語の底荷」としての短歌を、生活の中で孜々として紡ぎ続けている。かつて杉本秀太郎（フランス文学者、国文学者）が、京都を徹頭徹尾一生活者の眼で描いたからこそ、杉本の『洛中生息』（1976）が不朽の京都案内書となったように、京都西陣に棲み、西陣で生きる喜びと哀しみ

を綴った本郷の短歌は、読む者の心をとらえる強い光芒を放っている。

「高齢者作品のおもしろさも現代の大きな特徴でもある」と小高 [10] は述べている。その観点からも本郷の一層の精進に期待したい。

【参考文献】

【歌集】

- [1] 本郷住枝歌集：黒門通り、柘書房（1998）
- [2] 同：晩照、本阿弥書店（2010）
- [3] 同：京都西陣を紡ぐ、大垣書店（2017）

【歌論】

- [4] 上田三四二：短歌一生、講談社学術文庫（1987）
- [5] 大島史洋：齊藤茂吉の百首、ふらんす堂、（2016）
- [6] 歌林の会：馬場あき子百、三一書房、（1998）
- [7] 河野裕子・永田和宏：京都うた紀行、京都新聞社（2010）
- [8] 来嶋靖生：韻律・リズム 短歌の技法、飯塚書店（2003）
- [9] 木畑紀子：雨宮雅子の歌一〇一首鑑賞、柘書房（2005）
- [10] 小高賢：現代短歌作法、新書館（2006）
- [11] 今野寿美：歌ことば 100、本阿弥書店（2017）
- [12] 坂井修一：ここからはじめる短歌入門、角川学芸出版（2010）
- [13] 関川夏央：現代短歌そのころみ、NHK 出版（2004）
- [14] 杜澤光一郎 杜澤光一郎：宮柊二・人と作品、いりの舎（2013）
- [15] 永田和宏：新樹滴、白水社（2013）
- [16] 前登志夫：山河慟哭、朝日新聞社（1976）

【レトリック論】

- [17] 赤羽研三：言葉と意味を考える [I] 隠喩とイメージ、夏目書房（1998）
 - [18] 奥浩昭：文体としての《名詞立て》—作家竹西寛子の散文をてがかりに一、電気通信大学紀要第19巻第1・2合併号、pp.77-92（2006）
- 他
- [19] 中西進：亀が鳴く国—日本の風土と詩歌、角川学芸ブックス（2010）

【京都案内】

- [20] 杉本秀太郎：洛中生息、みすず書房（1976）
- [21] 林屋辰三郎：京都、岩波新書（1962）